

<研究ノート>

領域『健康』に関連する保育実践における考察

～領域に対する意識の変化について

An Educational Practices Overview of the Aims and Contents in the Early
Childhood Education Program's Health Component: Students'
Application

門谷 真希

Maki Montani

保育実践において保育内容として定められている五領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）が相互に関連し子どもの成長、発達を促すということは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において明記されている。しかし、各領域について理解を深めることや領域が相互に関連していることを意識し保育を行うことは、多くの保育者にとって容易ではない。また、ねらいは方向目標であり、到達目標ではない、という点も、小学校以降の学校における教科の扱いとは大きく異なり、一斉型課題活動を行うにあたり、活動におけるねらいの設定や期待すべき子どもの姿を思い描くことは、保育者をめざす学生にとっては大きな課題であると言える。本稿では、保育・教職実践演習でのグループ実践活動において、学生が保育内容「健康」の領域に関する保育実践であるとし、ねらいを定めた活動を中心に、活動を行う様々な過程（活動内容決定、指導計画作成、実践、活動の振り返り等）における、学生の保育のねらいと内容に対する意識の変化について考察する。

キーワード：保育のねらいと内容、領域「健康」、保育・教職実践演習

はじめに

平成29年度3月に幼稚園教育要領（以下教育要領）、保育所保育指針（以下保育指針）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下保育要領）が改訂され、公示された。これらの改訂の中で、保育におけるねらいや内容についても見直された。また、各領域のねらいを相互に関連させ、10の姿として整理された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに加えられた¹⁾²⁾³⁾。これらはねらい及び内容に基づく活動全体を通して幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な姿とされているものであり、保育に携わる者は、保育を計画するにあたり、以下に挙げられる10の姿を念頭に置いて、保育の方向性を定める必要があるとされている。文部科学省が幼児教育部会における審議のとりまとめの資料として作成したものが図1であるが⁴⁾、これは幼児期の環境を通して行う教育が、相互に関連しあい、小学校以降の教育で必要と

される資質・能力における三つの柱（知識・技能、学びに向かう力・人間性等、思考力・判断力・表現力等）に繋がり、三つの柱の基礎を養うことで幼児教育から小学校にかけて子どもたちが成長していく様子が示されているものである⁵⁾。

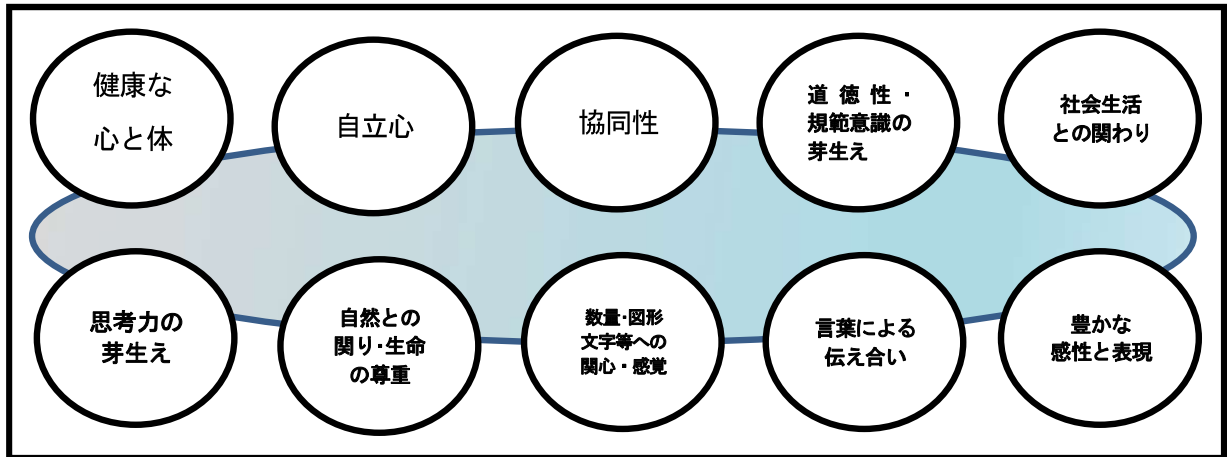


図1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージ（文部科学省）

具体的な姿としては、自分のやりたいことに向かって活動することを通して、心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動したり、主体的に周りのものに関わることで、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、工夫しようとする姿勢を育むことや、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになることなどが挙げられている。他にも、友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有すること、きまりや約束の必要性を理解すること、自分の気持ちを調整すること、情報を共有し判断したり活用したりすることや、友達の様々な考えに触れる中で、すべきことを自覚したり自分と異なる考えがあることに気付き、考え直し、新しい考えを生み出す喜びを味わうことなども挙げられている。また、自然に触れて感動する体験を通して、好奇心や探究心をもって考え、言葉などで表現しながら、自然への愛情や畏敬の念をもつようになること、身近な動植物に接する中で、生命の不思議さや尊さに気付き、接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになること、遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねること、絵本や物語などに親しむ体験を重ね、豊かな言葉や表現を身に付け、表現する喜びを味わい、自らを表現する意欲をもつようになることなども記されている（一部抜粋）^{1) 2) 3)}。

これらは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として初めて記載されたため、一見大きな変化のようにも見えるが、内容を見てみるとこれまで幼児教育、保育に携わる者が重要と考え、保育を通して育もうと努めてきた子どもの姿であることが分かる。領域は教科ではなく、5領域それぞれがあらゆる形の保育において相互に関係しあい、影響し合うものであることは、教育要領、保育指針、保育要領のいずれにおいても明記されているが、実際に教員免許や保育士資格を取得するために幼児教育や保育を学ぶ者は、領域別にねらいや内容、その指導法について学ぶことが義務づけられている。保育内容総論などで総括的に学ぶ機会は設けられているものの、教科のように捉えてしまう学生は少なくない。佐藤（2017）⁶⁾が、保育学専攻の短期大学生に行った保育内容「健康」に関する既有知識の分析を行う研究の中で、学生は基本的生活習慣に関連する援助が「健康」領域における保育者の援助の中心であると捉えている傾向があるとしているように、領域が互いに関連し合うという認識ではなく、保育内容における「健康」とは、身体

を健康な状態に保つことが主なねらいであると短絡的に考えてしまうなど、領域ごとに活動がなされているかのような解釈をしてしまう可能性は否定できない。従って、各領域のねらいや内容、指導法だけではなく、領域とは何か、ということに対する理解が深まるように授業を構成することは必要不可欠であると考え。今回の改訂において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として各領域のねらいを相互に関連させた10の姿が明記されたことで、保育者自身がこれらの姿と各領域におけるねらいや内容を照らし合わせ、分析することを通して、領域とは何かということも含め、保育内容に対する理解がより深まることが期待できる。そして、保育内容5領域のねらいや内容をもとに保育を行い、日々日常において意識的に子どもたちを援助することの積み重ねが、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に繋がり、その姿は小学校就学以降の子どもたちの姿に繋がっていくということ⁵⁾を理解し、計画を立て、実践できる保育者を養成することが養成校の使命であると考え。

そこで本稿では、学生が保育内容「健康」の領域に関する保育実践であるとし、ねらいを定めた活動を中心に、活動を行う様々な過程（活動内容決定、指導計画作成、実践、活動の振り返り等）における、学生の保育のねらいと内容に対する意識の変化について考察する。

方法

近畿圏内にあるN短期大学に所属する学生（2回生）79名を対象に、保育・教育実践演習の授業の一環として行われる保育実践の振り返りシートを分析し、理解の変化について考察する。

学生は通学経路によって9グループ（各グループ8～10名）に分けられ、1年間を通じて同じメンバーで季節ごとに計4回（春・夏・秋・冬）の部分保育と地域の子育て支援への参加を行う。最初に、グループにおいて年間計画を作成するにあたり、年間の目標を定め、その目標をもとに4回の実践に対する目標と子育て支援における目標を設定する。その後（各回を数名がリーダーとして担当するため）、全員が一度はリーダーとして活動できるように、各回のリーダーを決定する。年間を通しての活動になるため、4回の実践内容（例：ペープサート劇・パネルシアター等）については異なった活動を経験することができるように計画することを促す。その際、年間を通しての活動内容を年頭に計画するものの、各回の振り返りにおいて課題とされたことをもとに再検討することが可能であることを伝え、PDCAサイクルを意識し活動できるよう配慮する。

設定した目標や保育所保育指針、幼稚園教育要領をもとに、リーダーが指導計画を協力して作成する。作成後、第1案をグループ会議にかけ、グループメンバーからの意見や情報を収集し、加筆修正したものを第2案として再度グループに提示する。第2案が承認されると、指導計画をもとにグループ全員で担当を決め、準備を行う（第2案が承認されなかった場合は、第1案と同じ過程をくりかえす）。準備と並行して実践先を訪問し、日程や場所、参加者の人数等を確認する。準備においては、物品購入起案書の提出を義務付け、各グループにおいて予算の範囲で活動を企画するよう促したり、練習場所や準備物作成場所の確保においても施設使用許可書を提出したりするよう、教育現場や保育現場において必要とされる手続きなども実践できるように演習内容を構成する。保育実践前の準備段階においては、活動した日時（活動時間を含む）を、参加者、活動内容とともに活動記録として残し、振り返り時に参照できるようにする。

そして保育所や幼稚園、認定こども園などで計画した保育を実践した後、振り返りシートを用いて振り返りを行う。計画を立てる際、保育内容の領域を意識し、実践する活動における、ねらいや内容を設定すること、また、振り返りを行う際に、振り返りシートを記入することで、ねらいや内容（または活動自体）について適切であったか等、共通の項目に対して振り返ることを促し、その結果を分析する。

本稿では、保育内容「健康」の領域に関する活動のみについて取り上げ、その活動前と活動後において学生の保育のねらいや内容に対する意識の変化について分析する。

結果

9グループがそれぞれ設定した36種類（子育て支援における活動を除く）の活動の内、指導計画を作成したリーダーの学生たちが保育内容「健康」の領域に関係するねらいや内容を意識した活動であるとしたものは全部で5つあり、それらの活動内容の概要について表1にまとめた。

表1 保育内容「健康」に関連する活動一覧

季節	活動の種類	活動名	概要
春	劇	夏野菜と体調管理	夏野菜を収穫し、調理するという内容の劇を観て夏野菜と体調管理について学ぶ
春	劇	もったいないばあさん	もったいないばあさんを主人公とした劇を観て、日常生活における生活習慣を振り返る
春	ペープサート	やさいのおしゃべり	絵本「やさいのおしゃべり」を題材としたペープサート劇を観て、食べ物の好き嫌いについて考える
秋	紙芝居・劇	目について	紙芝居と劇を使用し、いろいろな動物の目の仕組みと人間の目の仕組みを比べ、目を大切にすることを学ぶ。
秋	紙芝居・体操	動物体操	動く手作り大型紙芝居で動物体操を学び、その後、動物体操を実際に行う。

それぞれの活動について活動前と活動後における保育のねらい、内容に対する意識の変化を、活動記録をもとに整理する。

一つ目は「夏野菜と体調管理」を題材とした劇であるが、計画するにあたり、まず、実施される時期において適切な活動、内容であるかどうか議論されていた。春の活動は5月の第3週目に設定されていたため、新学期に伴い変化した子どもを取り巻く環境や子どもの姿に加え、予定されている行事や季節の移り変わりに関わる事項等を考慮した結果、実践園の子どもたちが、夏野菜の収穫に向けて日々水やりをしていること、また、体調を崩しやすい季節が移り変わる時期になることから、この題材で劇をすることに決定したという経緯であった。題材についての話し合いでは、領域について議論されていたという記録は見当たらなかった。しかし、指導計画を作成する段階になり、ねらいと内容を決定する過程において、領域に関する話し合いがなされ、題材として夏野菜を使用し、締めくくりとしてそれぞれの野菜について摂取することでどのような効果が期待できるかなどを説明するパネルを準備することが決まり、「健康」の領域におけるねらいと内容を、教育要領、保育指針、保育要領において確認している記録があった。話し合いを受けて、ねらいを「劇を観ることを通して①夏野菜の特徴を知り、育てること、食べることに興味をもつ。②戸外で活動するときに注意すべきことについて考える。」とし、内容を「①マナーを守って観劇し、夏野菜について知る。②観劇を通して、戸外で活動するときには、帽子を着用することや水分補給を行う

ことを学ぶ」としていた。

実践後の振り返りでは、「健康」の領域における活動であるという理解のもと活動に取り組み、実践を行ったが、実際に行ってみると、保育者がねらいとしたこと以外にも、様々なことを感じ、考え、学ぶ子どもの姿があったことを記録している。劇中に戸外活動において気分の悪くなった友だちを助けるシーンがあったことから、劇の感想として「誰かがしんどくなった時は助けることが大切だと思った」、「一人で水やりをしていたらしんどくなくても誰も助けてくれなかったから、協力してする方が良いと思った」など、子どもたちと共に劇を振り返るという活動を行ったことで、子どもたちから保育を行う上で、ある領域だけにとどまる活動は少ないということを学んだと記されていた。

二つ目は「もったいないばあさん」の劇である。この劇も春の同じ時期に行ったため、一つ目のグループ同様、子どもたちの生活背景に目を向け、活動内容の議論を行っている様子が伺えた。しかし、このグループに関しては実践前のどの段階においても領域に関する話し合いがなされた形跡は見られなかった。実際に、実践後の振り返りにおいて、指導案作成段階から実践に至るまで、保育内容を意識していなかった、という学生もいたことから、初めての実践において、このグループは領域について深く考えることなく指導計画を作成したといえる。指導計画を作成した者の中には、ねらいと内容を考える際、「健康」領域を意識して作成した、と振り返っている者もいたが、グループに伝えられた形跡は見られなかった。また、その他の領域に関しては活動記録においても、振り返りにおいても全く言及されていなかった。この活動においてねらいは、「もったいないという意識をもって生活することの大切さを知る。」とし、内容は『もったいないばあさん』の劇を観ることを楽しむ。」とされていた。活動後、振り返りシートにおける「活動を行う中で意識した、または考慮した領域との関連性について」という問いに対しては、劇中や劇後に子どもたちに質問することで、発言する機会を与えたことは「表現」の領域に関係する、としている学生と、「もったいない」という言葉について考える内容であったことから、「言葉」の領域に関係するとした学生がいた。10名中、2名のみ、複数の領域を挙げ、活動において一つの領域のみに関わる内容になることはほとんどないということを明記していた。

三つ目は、絵本「やさいのおしゃべり」を題材として作成されたペープサートを使用した劇である。このグループに関しても前述の2グループと同様、春の実践であったため、時期や子どもの姿に関する話し合いがなされていた。また、1つ目のグループと同様、実践園において子どもたちが栽培活動を行っていることを踏まえ、題材を選択していた。このグループは最初の話し合いから領域についての記録があり、実践後の振り返りにおいてもグループ全員が領域について何らかの意識をもって活動を行い、活動後の振り返りでも領域について言及していた。活動準備期間においては、食べ物の好き嫌いに関する劇であるということから「健康」の領域に関わる題材であるということ、「嫌い」と言われたり、冷蔵庫の中で忘れられたりし、野菜が心を痛める場面が出てくることから相手の気持ちを考えて行動することを促し、「人間関係」の領域にも関わる題材であるということなどが議論されていた。実践前、実践後にかかわらず、複数の領域が相互に関連していることを理解している記述があった。しかし、実践前には「健康」と「人間関係」に関連する、とし、実践ではこの2領域を意識して行ったとしていたが、実践後はペープサートを使用し、野菜の気持ちの変化を表裏で表したことに関し、実践園の先生が子どもたちに「気持ち」の表わし方についてペープサートの表裏を利用し説明されたことを受けて、「表現」の領域に関わっていると感じたことや、気持ちを表す言葉が使用されていることで「言葉」の領域、また、野菜の数を数えることは「環境」の領域と、関連性の深さに違いはあるが、5領域全てに関わる保育であったと記録している。

四つ目は「目について」の手作り大型紙芝居と劇であるが、3回目の実践となる秋の実践であり、10月の第1週目であったことから、10月10日の目の愛護デーに関連する紙芝居と劇を行うことに決定し、計

画を立てた経過が記録されていた。春の実践と同じく子どもの姿や時期、季節などを考慮して計画するだけでなく、春、夏と実践を繰り返したことで見出された課題を踏まえながら、計画を立てていることが活動記録より伺えた。したがって、指導計画作成時から「目の愛護」という題材で目を大切にすることについての実践であるため、「健康」の領域に深く関わる内容であるが、10月10日がなぜ目の愛護デーになっているのか、「愛護」という言葉や「10月10日」という表記について説明することを盛り込むことは「言葉」や「環境」の領域にも関わるということなどがねらいと内容についての詳細を決定する際に議論されていた。実践後には子どもたちに参加してもらい、クイズに答えてもらったり、目を大切にすることのできることを歌にして一緒に歌ってもらったりすることで「表現」にも関係する内容であったこと、また、目を大切にしようとする姿勢を育てるということは、「人間関係」における「自分で考え、自分で行動すること」に繋がる為、「人間関係」にも関係している内容であったと考えたことなどが記録されていた。

五つ目は「動物体操」で、様々な動物がそれぞれの特徴を活かした体操を子どもたちに教えるという内容の大型仕掛け紙芝居を作成し、その後音楽に合わせて動物体操をみんなで行うという設定保育であったが、運動の秋、に着目し、計画、実践したもので、このグループでも、子どもの姿や行事、季節などを考慮する他、春と夏の実践での反省、課題をもとに活動内容やねらいを決定していた。春の活動において課題とされた、ねらいを意識して活動を行うことや、夏の活動において課題とされた、状況に応じて臨機応変に対応するためにはどのような準備が必要か、指導計画作成時から実践準備期間を通して議論されていた。秋の実践では、「運動の秋」をテーマとして「体操」を行うため、一つ一つの動きを大切に見本を見せることや、仕掛け紙芝居を作成する際にも、動きがはっきりわかるように作成するにはどうすればよいかなど、「保育者や友だちと一緒に体を動かすことを楽しむ」というねらいを達成するために、どのような内容、保育実践にすべきかについて話し合いを重ねたことが記録されていた。実践後には、グループのメンバー全てが活動のねらいを意識しながら実践することができたと振り返っており、領域への理解が深まったとの記録も見られた。

実践終了後、学生全員を対象として1年間の実践活動における質問紙調査を実施した。質問項目は全部で10項目あり、その内「活動を繰り返す中でPDCAサイクルに対する理解が深まった」「領域に対する理解が深まった」に関しては、79名全員が「おおいにあてはまる」「あてはまる」のいずれかを選択した。

考察

実践記録を分析した結果、保育内容に関する授業を全て受講し、幼稚園教育実習や保育実習を経験している学生においても、領域そのものについての理解や領域と日々の保育との関連性についての理解が十分であるとは言えない状況にあることが伺えた。

一つ目のグループにおいては、夏野菜の収穫について、また、その野菜を使って調理するという内容の劇を作成していながら、実践前後にかかわらず、話し合いにおいて保育内容における「環境」の領域に関する記録は全く存在していない。1年次に履修した、保育内容「環境」の授業において夏野菜を栽培、収穫したにもかかわらず、9名のメンバー全員が誰一人として「環境」の領域が関連する内容であることに気づけなかったことから、授業での経験が知識と結びついていない現状があるということが示唆された。保育・教職実践演習の授業担当者からの指摘により、夏の活動からは、複数の領域に目を向けた議論がなされていたが、単に5領域全てについて議論がなされていた記録があるにとどまり、活動において領域が相互に関連し合うことを十分に理解できている内容は見受けられなかった。

同じく五つ目のグループにおいても、計画した活動が「健康」領域であると意識し、実践を行ったとい

うことは記録されていたが、ねらいにおいて「友だちと一緒に」としているにもかかわらず、活動記録からは、「共に活動することを楽しめる」よう意識して保育を行った様子は伺えなかった。言い換えれば、「人間関係」の領域にも関連する、つまりどのような活動を行うにしても、領域は相互に関連し合うという意識が希薄であったため、「体を動かすこと」に意識が集中したのではないかと推察される。

二つ目のグループでは、子どもたちがルールを守って園生活を送る、ということに焦点を当てた内容の劇を作成しており、劇の内容には、手洗いの後は必ず水が止まっているかどうか確認することなどが含まれていたが、これらは子どもの自立に関する支援でもあるため、広くは「人間関係」の領域にも関わっていると言える。しかし、教育要領、保育指針、保育要領のいずれにおいても参照された記録がないということから、領域についての認識や保育との関連以前に、保育を計画する意義や必要性、そしてその手順等、保育や教育を行うにあたり見通しをもって計画的に行わなければならないということから再確認する必要があることが伺えた。このグループは1年間を通してどの保育実践においても、活動内容やそれらの準備等を行う上で、また、グループで協働する上で、授業担当者の援助を必要としていた。従って、このグループに関しては、保育・教職実践演習の授業において保育実践そのものの内容を工夫することやその意義を理解することが学びの主ではなく、共に働くこと（協働すること）やいかにコミュニケーションをとるかということが学びの主体となっていた。保育に関する知識、技術の向上、より実践的な力を育むことが目的とされる保育・教職実践演習の授業において、それらの目的を達成するためには、実践的な活動をグループで行い、協働する力を養うことの重要性が浮き彫りになったといえる。

三つ目のグループ、四つ目のグループでは、実践前後において複数の領域が相互に関わっていることを意識し活動していたと記録されているが、実践園からのフィードバックにおいても「ねらいと内容が一致していた」、「ねらいを意識し、活動ができていた」「活動を通して、伝えたいことが明確であった」と評価されていた。これらの評価を受けて、学生たちは、保育者がねらいを意識し活動を行うことは、日々の保育において重要であることが実感できたとしており、保育を計画的に行うことの重要性やPDCAサイクルを用いた自己評価を通して自身の保育を改善することの必要性について理解できたと振り返っていることから、複数の領域が相互に関わっていることを理解することができて初めて実践の中でそれらを意識し行うことができ、実践後にはPDCAサイクルを活用し保育をより良いものへと改善できる力がつくのではないかと考える。

日々の保育を漠然と行うのではなく、ねらいを意識して行うことは重要であり、また、毎日の活動におけるねらいや内容が教育要領、保育指針、保育要領に記された領域のねらいや内容につながり、最終的には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向かっていくことが求められるため、保育者がその内容を熟知し、意識し、援助していくことは必要不可欠である。教育要領や保育指針に記されているねらいや内容は、教育、保育に携わる者であれば少なからずとも重要であると考え、日々の保育において意識し、大切にしようとするものであるが、学生の活動記録からもわかるように、運動遊びは「健康」の領域といったように、短絡的に活動と領域におけるねらいや内容を結び付けてしまう状況も見受けられる。一つひとつの活動が相互に関連するよう計画されていなければ、総合的な発達を促すことが難しくなる。従って、一年間の流れの中であらゆる力を遊びの中で育むことができるように努力、工夫するためには、子どもたちの姿を鑑み、活動のねらいや内容をしっかりと定め、総合的な視点から見通しをもち援助することが重要であると考えられる。

実践活動を通して多くの学生が、ねらいとしていたこと以上に「子どもたちが様々なことを感じ、考えてくれた」と活動を振り返っていた。また、その様々なことを感じ、考えることが子どもたち一人ひとりの成長を促すということについても、回を重ねるごとに理解が深まったとしていた。今回行った実践活動

は全て一斉型課題活動として行われた活動であるが、これらの活動を通して学生は、鯨岡（2015）が自身の著書⁷⁾で提言した、「同じ結果が得られるように事を手順どおりに運ぶ画一的な保育者主導の対応ではなく、全員に課題を投げかけた後には、子ども一人ひとりのイメージや発想を大事にして、むしろ一人ひとりの結果が違うことを半ば期待する対応」の重要性を実感していることが明らかになった。

1年間を通して保育実践を行い、活動記録を記し、領域に関する理解とPDCAサイクルを意識した振り返りを行うことで、「領域に対する理解が深まった」「PDCAサイクルに対する理解が深まった」、という問いに79名全員が「おおいにあてはまる」「あてはまる」のいずれかを選択したことから推察しても、実践において明確な視点を定め振り返りを行うこと、また、PDCAサイクルを経験できるような活動を促すことが、授業を通して学生の実践力を養う上で重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」2017
- 2) 厚生労働省 「保育所保育指針」2017
- 3) 内閣府 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2017
- 4) 文部科学省 2016年8月26日作成 資料1 幼児教育部会における審議の取りまとめ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm
 (平成30年1月15日取得)
- 5) 無藤 隆代表 保育教諭養成課程研究会「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか〜モデルカリキュラムに基づく提案〜」萌文書林 2017
- 6) 佐藤晶子 「保育専攻短大生の保育内容「健康」に関する既有知識の分析」 駒沢女子短期大学研究紀要 (50), 55-62, 2017
- 7) 鯨岡 峻 「保育の場で子どもの心をどのように育むのかー「接面」での心の動きをエピソードに綴るー」 ミネルヴァ書房 2015